

視 座

大崎地域の看護師養成

宮城県医師会理事

佐藤 龍 行

大崎市医師会附属高等看護学校は、平成5年に前身である古川市医師会附属高等看護学校として開校し、来年度は創立30周年になる。宮城県北で唯一の高等看護学校であり、2年課程（定時制）で修業年限は3年間、卒業生は883人を数える。

当校の創立については、古川市医師会史に経過が記載されているが大変困難な事業であったようで、医師会の先輩たちの志、努力が見て取れる。それによると、昭和30年代には古川市立病院（現大崎市民病院）にて准看護学校が運営されていたが、当時の佐藤武雄医師会長と成川二郎市立病院長との間で准看校は医師会が担当し、市立病院には新たに高等看護学校を設置するという話し合いがなされた。昭和41年に古川市医師会附属准看護学校が創立されたが高看校設立は実現せず、昭和48年には宮城県当局に県立の高看校の設置を陳情したものの時期尚早として見送りとなった。看護職員の養成という重要な仕事は誰かが行う必要があるのだが、公立の高看校の実現は早期には期待できなくなった。その後も看護師の需給は厳しさを増し、また高看志向が社会的趨勢で、進学先が近くにない古川市医師会附属准看護学校の入学者は減少し、古川女子高衛生看護科の卒業生も浪人して進学コースを志して、そのまま仙台や関東の医療機関に就職する現象が多くなった。准看護師さえ確保できればいいという意見も含めて、看護職員確保は地域の医療機関の最重要課題であり、医師会立の高看校を開設すべきか否かは医師会長選挙の一つの争点になるほどであった。

このような経緯を踏まえ、平成2年4月に佐藤重行医師会長は、学校創設を意図して高看設置検討委員会（木村靖委員長）を設けて検討を重ね、その答申を受けて同年10月に賛否を問う臨時総会を開催し、会員の総意により設立に向けてスタートを切ったが、それからの開設までの準備がさらに難事業であり、特に専任教員の確保が最も困難であったようだ。

この専任教員の確保は今でも難しい問題であり、資格取得に必要な看護教員養成講習会がしばらくの間宮城県で開催されておらず、当校でも教員を自前で育成するために、講習会を開催している北海道や関東方面などに職員を派遣し、教員養成していた。これは宮城県全体の問題でもあって、この講習会を宮城県で開催するように佐藤和宏会長をはじめとした県医師会の猛プッシュもあって、昨年は久しぶりに宮城県で開催されやっと一息ついた。

当校創立時は県保健環境部や県医師会の特別な計らいもあり、開校前の平成3年と4年に仙台市で開催された講習会に職員を2名ずつ派遣し、なんとか専任教員を確保することができた。ただし教務主任

は専任教員の経験が3年以上でなければ認められず、これも各方面に働きかけ、やっと確保することができたとのことであった。

実習病院については古川市立病院、涌谷町国保病院や古川緑ヶ丘病院（現こころのホスピタル・古川グリーンヒルズ）の理解、協力があり、やはりこのような病院群も看護師確保に苦慮していたためか比較的スムーズに確保できたようである。

設立、運営にともなう資金も大きな問題であり、特に人件費は開校前には修業年限の3年間分の全職員を充足していなければ認められないことから、平成3年からの教員養成講習会の受講者には給与を支給する必要がある、開校後生徒数が定員に達する3年目までは大幅な赤字運営となる見込みとなっていた。

ただし、厚生省の看護婦養成強化対策の他に、宮城県や古川市の理解も得られ、隣接地域の医師会や関係者からの設立を要望する声にも背中を押され、平成4年9月に高看指定申請書を提出することができた。11月5日には厚生省の現地調査が行われて、指摘された事項をクリアすれば開設許可するとされ、学則、校舎整備、図書教材整備計画、教育実習計画、財政計画、職員待遇等広範囲にわたる多数の問題点を突貫工事ですべて見直し、11月17日に改善報告書を提出した。

申請書は現地調査の意見を添えて平成4年12月7日に開かれた医療関係者審議会にて詰問され、無事通過した。その後直ちに生徒募集を行い、願書受付は平成5年1月13日から、入学選考は2月6、7日という短期間で行ったにもかかわらず、入学希望者は定員の3倍以上も集まったのは、医療機関のみならず、当地域の准看護師が学校創設を待ちわびていたからであろう。2月15日に30名の定員のところ厳正な審査の上38名の合格者が発表され、4月10日に第一回生の入学式が行われた。

初代学校長は高看設置検討委員会の委員長で、立ち上げに多大なる貢献をした木村靖古川市医師会理事が就任し、1、2回生を受け入れ軌道に乗ったのちに勇退された。2代目の学校長は佐藤重行医師会会長が兼務し、平成18年からは、設置検討委員会から創設に係り開校時から副学校長として学校運営に尽力した、宮下英士大崎市医師会理事が就任した。

宮下学校長は先にも述べたように高看の構想を検討するところからずっと本学に携わっていて、学校に関することは何でも知っている生き字引のような、頼りになる学校長であった。私は宮下学校長の下で平成22年に副学校長に就任したが、学校長の決断を聞いているだけで学校はスムーズに運営されており、私は申し訳ないと思いながらもずいぶんと楽をさせてもらった。永遠に宮下体制でいいのではないかと思っていたが、平成30年に大崎市医師会副会長に就任なさったため勇退し、現在は私が4代目である。

高看校が始まったころは入学希望者が殺到したが、既に医療機関に属していた准看護師が一通り受験し、それに加え築館の准看校や古川女子高の衛看の閉鎖、また市町村合併に伴い大崎市民病院が整備、拡大し、看護職員が募集増加されることを考えて当校の定員数を40名に増員したこともあり、受験者数の減少が厳しくのしかかってきた。さらに大学や私立の看護学校の新設が続いたのも当校にとっては痛手であった。

また、当校は夜間の定時制のため、仙台などの遠方から来る専任教員は度々離職することもあり、職員の確保はいつも困難である。ここ2年間は新型コロナウイルス関連の対策にも悩ませられている。

ただ、県内では気仙沼高看に続き宮城県高看も閉校することが決まり、県内の進学コースは当校のみとなることで重要度がさらに増すことが予想される。これからも県北、大崎地方の看護職員養成のため研鑽を続ける所存であり、会員の皆様のご支援、ご協力の継続を是非ともお願いしたい。

